

の境内からは、黒沢の山野がほとんど一望のうち眺められる。

この庵は、臨濟宗妙心寺派に属し、養賢寺の末庵で、
医王山東光庵と呼び、本尊薬師如来さままつている。
今から三百六十年ほど前、元和二年二月十五日、黒沢村
沙月嘉衛門の創建と伝えられ、当時は谷向いの古庵と呼
ばれている所であったといわれている。当時の沙月家は
黒沢の六軒林といわれていた最も古い家柄であった。そ
の後、村中が佐伯の殿様毛利家の菩提寺である養賢寺の
檀徒になったが、どうしてまうなつたかはつまびらかで
ない。

其の後、延享年間養賢寺住職(山和尚)によって、現在
地に東光庵が営なまれ、今日まで幾代かの住職が法燈を
守りつづけ、その中には蘭菴英和尚や、近頃は金田和尚
の撮り、地元の人達に今なお尊敬されている方がある。
現在の庵は明治五年頃の建築で、もう百年を越してい
る。

この東光庵で有名なのが庵先の二本の塩釜樫(彼岸樫)
で、匡山和尚が嗣山された頃からあったものと思われ
る。旧藩の頃は毛利の殿様が花見に来られたとか、明治十年
十年の西南の役には、官軍の将兵が戦陣のなかさめに花
見をされたとか、また明治の文学者国木田独歩先生が、
佐伯在住のみぎり生徒と共に花見にゆつて来たとか、虚
実とりまぜての伝承がある。とにかく昔はとくに花見客
で賑わった由である。当時から桜は二本であつて、庵に
向つて左の樫が幹回りが一丈八尺、右の一本が一丈三尺、
高さは十丈余もあつたといわれていて、満潮の時は大き
な東光庵の建物も花下かくれて見えない程で、その眺め
はまことに壯観であつたという。しかし惜しいことに明
治の末期と、大正の初めの台風で倒れてしまつた。

しかし村人たちが手をつくして起こし、今はその株か
らの芽生えが繁茂して、毎年春の彼岸ごろには、とても
美しい花を咲かせて居る。

以上が東光庵についての沿革の紹介であるが、何分研
究に浅い筆者で、事実を外れているところもある。お
少るがいただけなら幸いである。

(おわり)

大阪短信

長谷川 等

桃菴塾岩崎先生のこと、洵に有難く拝読しております。出来れば「岩崎先生と山田俊郷先生」との関係も追録賜らば幸甚に存じます。

山田俊郷先生は、私が親しくご指導をうけた方ですが、私の祖父(貴川長兵衛を「命の恩人」と思つて頂いて、年令的には孫のように私を特にお世話下さいました。

私は上阪してすぐに山田俊郷先生とお話ししました。そのうちに出荷先生と私の関係が生じたのでした。

山田先生、岩崎先生と、二人の御土の大使輩のお偉い方が二人に私に可愛がられて大阪人になりました。多分山田先生のお葬式の時に、追悼の礼を岩崎先生が捧読した筈です。山田先生のお孫さん連も、今どこにいられるか、岩崎乾一氏なら知つておられるでしょう。

それから、私の佐伯中学同期生で、林梅大君がおります。佐伯の人で、この人の職年を知っている方は少ないと思ひます。

関西学院を出てアメリカのフーバー大卒を二番(番はアメリカ人で卒業し、第一次上海事変直後日本に帰るが、日本内地では当時彼を容れる処なく、終に近衛さんのお世話で、東亜同文書院教授となり、近衛さんのお世話スバイ(良い意味か)として、また日支の若くは人達の極手を生涯の仕事として活躍していたが、惜しい事に終戦直後上海で板殺しました。(後略)